

# ロカルノの信仰の亡命者について

## —— ツァーニーノとオレッリ ——

吉 田 隆

「宗教改革の余り注意されていない諸結果のなかでおそらくもっとも重要なものは、[信仰のために]追放されて故郷を追われた何千人もの熟練手工業者職人たちによる工業力の広い普及であった。それまでまったく、すくなくとも主として、一、二の場所ではしか行われていなかった工業が、いまや亡命者の定着したいたるところに植えつけられた」

「ドイツの諸領邦は、西ヨーロッパ諸国から宗教的亡命者を通して繊維工業の分野におけるさまざまな刺激と新製法を受け入れた唯一の地域ではなかった。ほとんどドイツ以上にといつてよいほどに、スイスの繊維工業の発展はこのような[宗教的亡命者の]来住の成果である」<sup>(1)</sup>

「①18世紀末にチューリヒで出版された書物の記述。チューリヒ州にたくさんある、カトリックの地域とプロテスタントとの地域を両方とも見渡せる山に登ってみると、後者の地域には、新しい家屋やよく耕された畑や果樹園が示すように、勤勉と労働経済的繁栄が広がっているが、前者の地域にはそれらがまったく欠けていることが判る。②同じく19世紀半ばの書物の記述。プロテスタンティズムは多くの活力を工業から引き抜いたが、もっとも多く活力を工業に与えた。実際われわれは、チューリヒの工業を、ルター派の信仰から区別して改革派の信仰と関連づけることができる」<sup>(2)</sup>

### はじめに

W・ボードマーは、1550から1700年にかけてスイスに亡命した移住者がその後のスイス経済に与えた影響についての論考で(Bodmer, Walter, *Der Einfluss der Refugianteneinwanderung von 1550-1700 auf die schweizerische Wirtschaft*, Beiheft 3 der Zeitschrift für Schweizerische Geschichte, Zürich, 1946. S.7-8)つぎのようにのべている。

スイスは、その歴史的な経過において、現代にいたるまで亡命者にとって度々避難場所にされている。連邦の建設以前から政治的亡命者、宗教的亡命者を受け入れてきた。・・・宗教改革以来、亡命者の多数は、自己の信仰と同じくするスイスの改革派の地域に一時的に滞在するか、または永続的に定住することをおこなった。

したがってスイスにおける亡命者の移住はそのごのスイスの人口の歴史的な動態の一部を形成することになる。

ジュネーヴに移住した信仰の亡命者がその地で果たした偉大な精神的な重要性は、ジャン・カルヴァン (Calvin, Jean, 1509-1564)、テオードール・ベザ (Beze, Theodore, 1519-1605)、ギョーム・ファレル (Farel, Guillaume, 1489-1565) の存在からも十分理解できる。

また、スコットランドの宗教改革者のジョン・ノックス (Knox, John, ca.1514-1572) とアングロサクソン世界の他の重要な宗教上の改革者ならびにヴァルド派は短期間であれ長期間であれジュネーヴや他のスイス諸地域に滞在した信仰の亡命者であった。・・・

16世紀前半のスイスの急激な政治的興隆に経済的発展は歩調をそろえなかった。・・・300年以來の初期資本主義的企業・経営形態の下、高度に発達した繊維工業をもち、ヨーロッパ大陸で文化的に最も発達した国イタリアとの接触は、フランスとの対立が原因で経済的にさらなる発展は閉ざされていた。・・・ところがしかし、16世紀から17世紀にかけてスイス北部の近隣の商工業が衰退し早期の重要性を失ってしまうのであるが、スイス盟約者団の改革の諸邦では商工業が亡命者の影響のもとで思いもよらない全盛・繁栄を得ることになると。<sup>(3)</sup>

16世紀に始まる宗教改革は、社会的規模の強力な宗教運動としてヨーロッパの国民生活全体に革新を及ぼし、中世の絶対的権威であった教皇の支配を根底から覆し、教会分裂を引き起こした。

一方、異端審問所の設置 (1542年) とトリエント公会議 (1545 ～ 63年) を契機に、カトリック側の対抗宗教改革 (Gegenreformation) が進み、ヨーロッパに宗教的動乱の時代が到来した。

この結果、対抗宗教改革のもとで容赦の無い弾圧が新教徒 (やユダヤ人) にたいして行われ、ヨーロッパの各地で、自己の信仰を保持し、迫害から逃れるために故郷を後にして亡命した人々、いわゆる「信仰の亡命者」 (Glaubensflüchtlinge) の大移動が生じた。

ヨーゼフ・クーリッschel (1878—1934) は、女王メアリのもとで迫害されたイギリスの新教徒、異端審問によってスペインから追放されたユダヤ人 (マラノス)、アルバ公の恐怖政治のもとで圧迫された南ネーデルランドの人々、ロカルノから追放されたイタリア人、などの信仰の亡命者が、新技術、新販路 (技術・産業の移転) をもって移住したことについて述べている。<sup>(4)</sup>

また、フランスでも聖バルテルミーの大虐殺(1572年)、そしてナントの勅令の廃止(1685年)後の主にフランス南部からのユグノーの移住(「商工業者の民族移動」)が生じた。

マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(Weber, Max, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. 1, Tübingen, 1920, 大塚久雄訳岩波書店1988年31頁)で「カルヴィニストのディアスポラ(散住)」を「資本主義経済の育成所」《Pflanzschule der Kapitalwirtschaft》としたゴータインの指摘を正しいと指摘し(大塚訳前掲書31頁 Weber, *a.a.O.*, S.27)。また、ヴェーバーは、ロカルノからチューリヒに移住したプロテスタントの家族ムーラルトや、キャヴェンナ出身のファミリーほかがチューリヒにおける近代に独自の資本主義的(産業的)発展の担い手となったと指摘している。<sup>(5)</sup>

上述の後で、J. クーリシュも17世紀から18世紀にかけてスイスの繁栄する工業は、ほとんどまったく入国した外国人から起こったこと、そしてスイスでは、チューリヒの絹織物工業は、ロカルノからの改革派の信仰の亡命者によって、他のすべての重要な工業部門はナントの勅令の廃止(1685年)後のフランスのカルヴァン派ユグノーによって、すなわちバーゼルのリボン織業、ヌーシャテルの編物業、ジュネーヴの時計工業などはナントの勅令廃止後にフランスから来住したユグノーによって、それぞれもたらされたと指摘している。またR.ブラウンも17世紀にチューリヒで社会的・政治的勢力を高め、さまざまな手工業ツunftのなかで重要な地位を占めるようになった一群の織物商人たちのなかには、企業家的能力を特に豊かに備えたプロテスタントの亡命者がいたと指摘している。<sup>(6)</sup>

## 1 ロカルノからの信仰の亡命者

### ロカルノの宗教改革と改革派の亡命

スイスへの亡命者の「散住」には、つぎの四つの波があった。

- ① 女王メアリーの迫害によるイギリスからの亡命者
- ② ロカルノからの亡命者
- ③ 聖バルテルミーの大虐殺後のフランスのユグノーの亡命者。

- ④ 三十年戦争勃発時の近隣諸国からの亡命とエウイ14世によるナントの勅令廃止後のフランスからのユグノーの亡命である。

これらの亡命者の来住は、スイスの人口動態に反映している。

W.シュニーダーは、ロカルノ人の来住によって絹織物と毛織物の取引の発展は都市チューリヒの人口を8000人から9000人も増加させ、16世紀末以来の1万人近い急激な人口の伸びは、その結果であること、そして1611年と1629年のペストの流行もチューリヒの人口を一時的に減少させたにすぎないと指摘している。また、H.ナープホルツも、16世紀末以降のチューリヒの経済的躍進はロカルノ人による外からの「衝撃」に負っていると述べている<sup>(6)</sup>。

ロカルノからチューリヒへの亡命者の「移住」が開始されたのは1555年である。

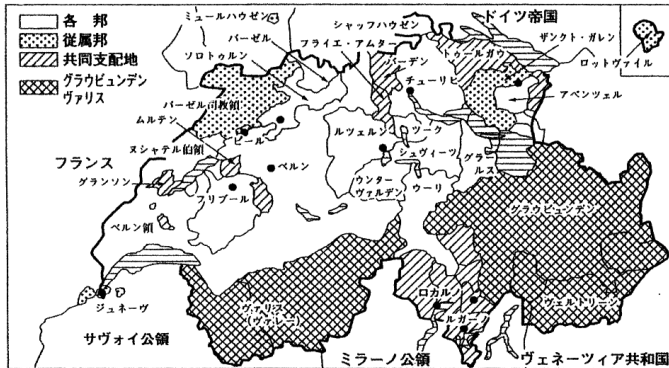
当時スイス・イタリア語圏のレーヴェンティーナは1441年以来ウーリに従属、ブレニオは1496年以来リヴィエラは1500年以来、ペリンツォーナは1500年以来ウーリ、シュヴィーツ、ニードヴァルデンに従属していた。

ロカルノもまたスイス盟約者団（ウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデン、ルツェルン、チューリヒ、グラルース、ツーク、ベルン、フリブール、ソロトゥルン、バーゼル、シャッフハウゼンの「一二邦同盟」）が1512年にバヴィア戦役でフランス軍をロンバルディーア平原から駆逐し、ミラノを征服することで、それ以降ドモ・ドッソーラ、ルガーノ、マッジャ溪谷、メンドリシオ（1521年以来）、キャヴェンナとともにミラノ公国から得た「共同支配地」Die gemeinen Herrschaftenのひとつであったのである（Rossi, Giulio; Pometta, Eligio, *Geschichte des Kantons Tessin*, Bern, 1944 S. 98）。これによってスイス盟約者団は、北イタリアの穀物輸入、すなわち北イタリアの穀倉地帯とその輸入路を確保し、念願の穀物不足を解消することができた。<sup>(8)</sup>

盟約者団の共同支配地の統治、すなわち現在のスイスのイタリア語圏ティチノー州辺地域のスイス化は、盟約者団に参与する邦（カントン）が任命する二年任期の代官（Land-Vogt）によって行われてたが、しかし、そこには宗教改革の結果として、カトリックの邦と改革派の邦との政治的、宗教的利害の対立が投影されていた。1529年の「カッペルの和議」でもチューリヒは、ツヴィングリが主張していたウーリー、シュヴィーツ、ウンターヴァルデン、ルツェルン、ツークのカトリック邦の領域内での福音主義の自由な説教を承認させることができなかったから、カトリック邦の支配領域内の共同支配地でも福

音主義からの自由な説教は承認されていなかったのである。<sup>(9)</sup>

従って、スイスの宗教改革運動は、緩やかな諸邦の連合体であったスイス盟約者団に新たな分裂の原因を与え、やがてチューリヒ、ベルンを中心とする福音主義派と中央部スイスカトリック諸邦との亀裂が生じることになる。



出典：森田安一『スイス』刀水書房，1980年，87頁より。

ところで「世俗権力の保護も人民の支持」も得られない知識階層の運動であったイタリアの宗教改革運動のなかで、<sup>(10)</sup> ロカルノは宗教改革の思想的立場のピエトロ・マルティーレ。ヴェルミーリ (Vermigli, Pietro Martire, 1500-62) やベルナルディーノ・オキーノ (Ochino, Bernardino, 1487-1564) らの影響を強く受けていた。

1530年、チューリヒ市参事会は、ロカルノの代官に現金出納係ヤコブ・ヴェルトミューラ (Werdmuler, Jacob, 1481-1559) を任命した。ヴェルトミューラは、カトリックの諸邦が敵視するなかで福音主義の立場から宗教改革の思想をロカルノで唱導する。

1542年に代官になったグラルースのヨーアヒム・ベルディ (Baldi, Joachim, 1527-1571) は、ロカルノの学者で司祭でもあったジョヴァンニ・ベカリア (Beccaria, Giovanni, 1511-1580) に会う。ベッカリアは、1535年から聖フランチェスコ派の修道院で学んでいたが、ツヴィングリの後継者、ハインリッヒ・布林ガー (Bullinger, Johann Heinrich, 1504-1575) やキリスト教徒による最初のヘブル語文法書『ヘブル語読解の手引き』(1490年) を出版したコンラート・ペリカン (Pellicanus, Konrad, 1478-1556) らの著作の影響を受けていた。

ベカリアは代官ベルディとの親交を結び、ベルディから財政的援助を得て

さらに改革派の著作物にふれることで、自分の神学的立場を改革派へと転じていく。

この過程で、彼はロカルノの有力者や名家・貴族の子弟、彼らの両親たちや他の賛同した人たちをも改革派の運動へと引き入れていくのである。

その主だったファミリーが、ツァンニーノ家、ムーラルト家、オレツリ家、デュノ家などである。やがて1548年には、ロカルノの改革派は、推定200人～211人(全住民の約1割)になった。

ヴェルディーの後任の代官は、ベッカリアと公開討論を開催したが、カトリックの演説家が論破されると、これを中止してベッカリアたちを拘禁した。しかし、武装した改革派の青年たちの要求を容れて彼を釈放した。ベッカリアは、プリンガーのいるチューリヒへ逃れた。

1550年の秋、ロカルノの市参事会と住民はカトリックの信仰を固守する声明を出し、バーゼルとシャフハウゼンは、カトリック地域での少数派プロテスタントの信仰は容認されない、というカッベルの和議に拘束され、ベルンはロカルノの改革派にたいする武力行使を準備していた。しかし、チューリヒだけがこれに抗議し、ロカルノの改革派の生命・財産を守る用意をしていた。

1554年11月7日、ロカルノの改革派の信仰共同体は、チューリヒ、ルツェルン、ベルンの三都市に団結を要請する書簡を送った。

同年11月18日に盟約者団会議は、カトリックの信仰に戻る意志のないものは全財産を持って次の懺悔火曜日までにロカルノから出ることを決議したが、チューリヒはこの評決を破棄した。

その翌年、1555年1月、カトリック諸邦の代表がロカルノに現れて120人の改革派の人々を召喚したとき、改革派の人々は、自分たちの信仰について次のように述べている。

「この教義は、多くの歳月のあいだ説教者たちによってわれわれに講解されてきた。神への絶えざる祈りによって、神の加護を教会員のすべては追感したのである。改革熱(新しがり屋)からわれわれはこの教義を受け入れたのではなく、教義を信仰することを告白したのである。ましてや、騒乱をもたらすことは、われわれが非常にきらったことである」と。

この召喚の翌日には、ローマ・カトリックの使節リヴェルタガ改革派に転じた人々をカトリックの信仰に戻すためにやってきた。

これに対して、ムーラルト家の女性バーバラ・ムーラルト(ヨハン・ムー



ラルトの妻)は、使節の信仰と彼女の信仰の不一致を勇氣にあふれ、大胆にも明確に主張し、使節を罪ありとしたため、立腹した使節は収監を要求したが、バーバラは逃亡して収監を免れた。(63頁のロカルノ人の迫害図を参照)

こうした、騒動の後、1555年1月に改革派の教義へ公然と信仰告白していた205名のうち93名が3月3日、ロカルノを離れ、同族・同語の地口ベレドに到着した。

同年3月30日には、チューリヒで亡命者の代表が住居と生計の配慮、イタリア語での説教を請願して承諾された。これ以降、ロカルノの改革派の大部分の人々は、故郷を離れてスイスの改革派の諸邦に散住を開始することになった。そしてロカルノからの「信仰の亡命者」をもっとも多く受け入れ、その結果として商工業を発展させたのがチューリヒだったのである。<sup>(11)</sup>

## 2 手工業都市チューリヒと亡命者の受入れ

亡命者たちを積極的に受け入れたチューリヒは、1336年のツunft革命以後、当時、手工業者が市政に参加した代表的なツunft都市で、スイス諸邦(カントン)なかでは(比較的)民主的な都市であった。

森田安一の諸研究(『スイス中世都市史研究』山川出版、1991年89頁以下)によれば、都市チューリヒの市政を担っていた市参事会は以下のような種類の手工業者・職業労働者の代表者によって以下のように構成されていた。

すなわち、(1) サフランSafran小売商人、行商人(2) 仕立屋Schneider裁断師、裁縫師、毛皮匠(3) しじゅうからMeiseブドウ酒店主、ブドウ酒呼売人、bどう栽培人、馬具匠、画工、仲買人(4) パン屋Weggenパン屋、粉屋(5) 天秤Waag毛織工、打毛工業、粗羅紗織業者、帽子工、亜麻布職工、亜麻布商人、漂白職人(6) 鍛冶屋Schmiden鍛冶屋、刀鍛冶、鋳造工、鋳鐘工、ブリキ職人、兵器鍛冶工、理髪師兼外科医、浴場主(7) 鞣皮工Gerwe鞣皮工、白鞣皮工、羊皮紙工(8) 雄羊Widder肉屋、ラントで家畜、牛を購入し、屠殺に従事する者(9) 靴屋Schuhmachern靴屋(10) 大工Zimmerleuten大工、左官、車大工、ろくろ師、材木商人、たる匠、市内に居住するブドウ摘み人(11) 船乗りSchiffleuten漁師、船運業者、車挽き、綱製造人、運搬業者(12) ラクダKämbel庭師、油商人、(古物、バター、チーズ、卵、家禽等を販売する)小売業者である。

商工業の営業は、ツunftによって規制され、農村にも及んでいた。<sup>(12)</sup>

「チューリヒは都市国家であった。13邦の圏内で、＜主要邦＞であったが、政治的にはベルンより意義が小さく、経済的、文化的にはバーゼルより劣っていた」。

「人々は農業と局地的商取引で生計を立てていた。それに加うるに、都市及び農村部には年金と傭兵勤務が生計の手段としてあった」<sup>(13)</sup>。

チューリヒは14世紀にはヨーロッパで有数の織物業の中心地であったが、15世紀にスイス盟約者団に加入してハプスブルク家と敵対した結果、その販路を断たれて織物業は衰退の傾向にあった。

織物業関係のツフツトである「天秤」から一人の参事会員も出ていなかった。それゆえに当時のヨーロッパでは優れた諸工業についての知識と技術に加えて幅広い市場ネットワークをもっていたロカルノ人亡命者の来住は、チューリヒの織物業の復興のみならず諸工業の発展を育成する好機となったのである。それは都市チューリヒの経済構造のみならず、チューリヒ領域内の農村にも変化をもたらすことになる。<sup>(14)</sup>

J.マリニアックは、K.デンドリカーの言葉を引用してつぎのように述べている。

「ツヴィングリーの宗教改革は、宗教的な変化のみでなく、倫理的、精神的、社会改革であろうとして、最後まで展開した」と。<sup>(15)</sup>

ツヴィングリーは、宗教改革のなかで、スイスの傭兵制度とそれともなう年金制度を批判している。列国から契約金を得て、スイス人同士が敵、味方に分かれて戦う傭兵制度によって農村の労働力は損なわれ、生産活動に支障をきたす。また都市からも徒弟層が多く出かけていき、手工業に支障が出ている。<sup>(16)</sup> ツヴィングリーにとって、傭兵の出稼ぎ労働は「神の祝福をもたらす生産的な労働」とは考えられなかった。ツヴィングリーは、農民の経済的破滅を傭兵制度に起因するとみたのである。<sup>(17)</sup>

1515年、チューリヒ領の農村では住民蜂起が起きていた。それまでチューリヒが領域支配拡大政策をとった結果、「毎年のように行われた戦争、そのための傭兵勤務の負担過重は、ラント住民の日々の生産活動をストップさせ、経済生活を圧迫していた」からである。<sup>(18)</sup>

ツヴィングリーのこの主張にもかかわらず傭兵による出稼ぎは止まらなかったが、1522年にはようやく「傭兵禁止令」「年金禁止令」が出されて、違反者に厳しい措置がとられた。<sup>(19)</sup>

こうして農村で傭兵制度が崩れはじめ、戦争が終わり、平和がおとずれた



とき、また、都市の製造業者から副収入を得ていた農村の人々がよりいっそうの副業を求めているとき、ロカルノからの亡命者が来住したのである。<sup>(20)</sup>

1558年3月18日、亡命者の第一陣が、つづいて5月12日に第2陣がアルプスの彼方から山岳、溪谷、湖沼、河川を經由してロカルノにチューリヒに到着した。

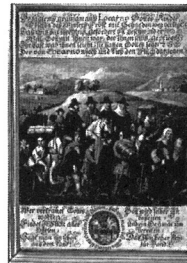
このときの亡命者は、総勢147名で、そのなかには金利生活者と大商人13名、教師1名、法律家1名、医者2名、手工業者12名(袋物師2名、製本工1名、毛皮職人1名、製革工3名、仕立屋1名、古物商人1名、ビロード織工1名、漁師1名)などがふくまれていた。また1558年4月5日の公文書に記録されている亡命者136名は、成人男性26名、婦人26名、青年8名、男児39名、女児36名、下女1名で、全員ロカルノ生まれであった。<sup>(21)</sup>



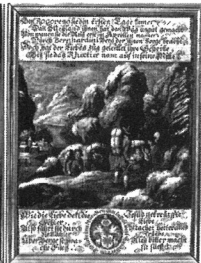
リヴァ



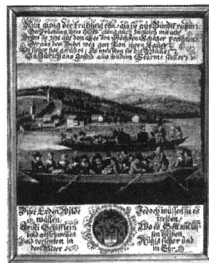
ベビア



オレリ



ムーラルト

ローザリノ  
ロカルノ人の迫害デュノ  
ロカルノ人の移住

(出典：Zwingliana, Bd.X, 1957, Nr.1)

これらのなかにパリス・ア・ピアノ、ルドヴィーコ・ア・ロンコ、ガリネリオ・カステリオーネ、アルベルト・トレヴェーノ、バプティスタ・パティオ、フランチェスコ・ヴェルサスカ、ヨハン・アントン・フォン・ムーラルト、フオン・ヨハン・アンブロシウス・ローザリノ、バルトロメウス・ヴェルザスカ、ヨハン・アントン・ローザリノそしてエヴァンジェリスタ・ツァニーノほかがいた。

チューリヒは、ツunftの利権が強かったから、スイスのほかの都市と違っ

て大企業(会社)の創設もロカルノからの来住者に簡単に市民権を与えようとはしなかった。

チューリヒの手工業者はロカルノ人の手工業者との商取引上の競争を恐れて彼らを締め出そうとしたために、ロカルノの亡命者の一部はバーゼルなどに移住し、ピチェンツァからの亡命者ペリッアリ家ほかのファミリーもそこでの諸工業の発展に寄与した。

チューリヒにとどまったロカルノからの亡命者は、チューリヒにイタリア伝来の新しい経営システムである問屋制、工場制そしてマニュファクチャーを導入し、市参事会が禁止していたヴェネツィアやミラノからの穀物の輸入のほかに、織物と香料・石鹸の輸入、鉄、食料品、銅鉄、バター、獣脂、革、金と金製品の取引など他北部ドイツの麻布の輸出を行ったのである。

1558年3月2日の参事会の決議には、亡命者たちにたいして店舗の購入の禁止、市民権授与の禁止、経済活動の制限、生業は一業に限ること、市参事会の承認なしに新種の商工業に従事することはできない、などの規制が定められている。しかし市民権も訴訟の権利も与えられない状況のもとで亡命者たちは地元の手工業者と対立しながら、あらゆる妨害を乗り越えてチューリヒでの経済活動を乗り越えてチューリヒでの経済活動を推し進めていったのである。<sup>(22)</sup>

### 3 信仰の亡命者の経済活動

チューリヒにおける資本主義的産業の発展にロカルノからの来住者が貢献したことを明らかにしたマリニアックは、代表的なロカルノ人家族の事例研究に先立って、16世紀末から17世紀後半にかけて都市チューリヒの有産市民の資産が著しく増加していることを、1559年に導入された工業関税と1621年に導入されたポンド関税の徴収額にもとづいて実証している。この二つの税は17世紀においてチューリヒ最大の財源だった。工業関税は、カントン(邦)・チューリヒで製造されてカントンの外へ輸出されるすべての製品に課せられ、ポンド税は関税的な性格をもち、邦内で邦外の者が購入したすべての商品、邦民が外国商人から購入したすべての商品に課せられた。

表1(A)～(C)はその要約で、1618年と1641年に税率が変更されたので三期に分けて、上位の5グループに属する有産市民の数とその資産額を示した

ものである。

1595/96年には最上位の第1グループ(資産75ポンド以上)は1名(資産額109ポンド)であったのに、1663/64年には資産75ポンド以上の第一、第二グループは36名(資産総額1万772ポンド)と増加していることがわかる。そして、これら有産市民のなかに、産業活動によって財をなしたロカルノ人の家族がいくこんでくるのである。

以下ではロカルノからの信仰の亡命者の経済活動を知るうえで再度エヴァンジェリスタ・ツァニーノ、そしてオレツリ(オレリ)のファミリーを取りあげることにしよう。

### エヴァンジェリスタ・ツァニーノ

1555年にロカルノからチューリヒに來住して以来、ミラノと交易を行っていたヨハン・アンドレア・ツェフィオの娘婿、エヴァンジェリスタ・ツァニーノは、チューリヒに新製品・新製法を伝えた亡命者のなかでひととき目立っている。多くのチューリヒ市民が新製品・新製法について彼の指導を受けている。したがって市当局のあらゆる記録にはツァニーノの名前がまっさきにみいだされる。<sup>(23)</sup>

ツァニーノは、チューリヒ到着後、絨脂や麻布・綿布をミラノと商取引をしていた義父ツェフィロから譲り受けた小売店で、義父と同じくヴェネツィアやミラノからの食糧・雑貨や織物の輸入業を始めている。

1558年、彼は織機2台を使ってビロードの製造を行うようになる。

市の公文書「在住ロカルノ人家族名簿(1564年12月21日)」から弟パウロス、妻、娘2人、息子2人、イタリア人の下僕9人、そして下女1名といった彼の家族構成(1554年6月の名簿では妻、1556年の妻と娘1人)を知ることができる。<sup>(24)</sup> 同年の異端審問法によって、ミラノ公国内の滞在禁止と通商取引が禁止されたとき、コモ[ミラノ公国領]でツァニーノ当局に捕まるが、脱出している。

1565年5月12日、ツァニーノは、市参事会にたいして新種の工業をチューリヒに持ち込むことを申し出た。申し出の内容は、ビロード織物作業所の拡張、イタリアの手本にならった製糸と織布の作業場の創設、イタリアの原料(繭)市場への依存から自由になるために養蚕に必要な桑の木の栽培、ミラノ風の絹、木綿、亜麻の染色場の創設と染色に必要な葉草の栽培などの許可であった。市参事会はツァニーノの申し出を承認した。そして彼のこれらの計

画は、その後のチューリヒ経済の初期の発展にとって決定的に重要な意味をもつことになる。

「ツァニーノの手工業都市チューリヒに希望をもたらした。彼は、多くの若い男女に亜麻の乾燥法を教え、指導をおこなった。彼によって都市の都市の手工業は栄え、多くの貧しい人々が扶養された。彼らの安らぎと生計が、十分に、糸を撚ったり、布を織ったり、生糸を巻きもどしたり、そのほかの仕事をすることによってもたらされた」とあるように、多くのチューリヒ市民が新製品・新製法について彼から指導を受けている。<sup>(25)</sup>

1567年、彼はチューリヒのエーテンバッハの“ヨルダン”に製糸用の水力紡車を組み立てた。これは直径4～5メートル、高さ2.5から3メートルの円筒の檻のようなもので、その中で巨大な紡車が回転した。檻の外側の柱に二列か三列の木製の杵が備えつけられ、その上に大きくて非常に重い紡錘がこわれやすい土台のなかにあった。紡錘は紡車からベルトによって無限に回転させられる。檻の内部にそれぞれ6つの紡錘が一定の距離で向かいあって立っていたが、その紡錘に差し込まれている糸巻きから、絹糸は小さい水平の紡車に巻かれた。その緩やかな回転は小さな紡車を大きな紡車から守った。大きな紡車は檻の内部の、垂直の輪軸近くを受けもった一人の人間によって動かされ、持続的に回転していた。主に身障者(眼が不自由)の人々が、おおかたは女性であったが低賃金で使われていた。<sup>(26)</sup>

ツァニーノは、前述の新種の工業計画の遂行に必要な熟練職人をイタリアから呼び寄せている。熟練職人の一部は亡命者であったが、大半はカトリック教徒であつた。この事実から、ツァニーノは、呼び寄せたイタリア人が熟練職人で、自己の<経営>に役立ちさえすればカトリック教徒であっても改革派であっても、信仰の是非は一切問わなかったことから、改革派の都市チューリヒに亡命していたにもかかわらず、彼は極めて合理的な思考で物事を処理していたようである。

ツァニーノが創設した綾織製造場は当時のドイツ語圏スイスでもっとも大規模なもので、集中作業所と問屋制との混合であった。綾織工業は以前からチューリヒにあって、縦糸用の亜麻糸と横糸用の綿糸が家内工業で紡がれていたが、ツァニーノは、チューリヒに模様のあるボンバジンの二重綾織の製造をもたらした。このような彼の一連の経済活動がもたらした数々の市への貢献を認め、同年、彼に市民権を与えている。これ以降1567年から1570年は、ツァンニーノの経済活動の絶頂期であったといえる。

1568年、チューリヒの手工業者のあいだでツァニーノをはじめロカルノの商人、製造業者にたいする反対が起こった。手工業者のなかにはロカルノの亡命者から織布技術を習得した地元のビロード織工がいた。しかし、彼らは、技術は習得したがロカルノ人の経営方法を少しも受け入れず、根っからのツunft的態度を改めなかった。”Alt Geist”にとらわれていたといえる。

手工業者の反対によって同年4月22日に市参事会はビロード織工組合に関する条例を制定した。これによって、ツunft親方の資格をもたないロカルノの商人たちは自家経営することを禁止された。一経営につき4台と織機台数が制限され、大規模な企業は禁止された。しかしツァニーノだけは例外で、最大7台の織機をもつことが許された。

彼はチューリヒでの企業経営を弟のパウロにまかせヴェネツィア、コモ、ツルザッハ、リヨン、フランクフルトの大市に商用で訪れている。

1570年4月5日、ツァニーノはイタリア風の毛織物の製造を考え、エッセンバハに水力で動く縮絨場を建設することを計画した。このときツァンニーノはイタリア風の毛織物製造法の導入とエッセンバハでの水力縮絨場の建設の認可だけでなく、ロカルノの自分の動産を保証金として、市参事会が1500～2000クローネの資本参加をするように懇願するが、この申請は市参事会によって否決される。やがて1570年を境にして彼の綾織製造は下降線をたどったようである。

1571年には資金難に陥ったにもかかわらず、彼は強気な姿勢をとりつづけ、さらに債務を大きくする。

結局、ツァニーノは1602年(1603年ともいわれる)の初めに負債を残して死去したが、彼の管理、経営方法、計画の一部は、チューリヒ生粋の市民に継承されて、一定の成果をもたらした。すなわち、彼の残した毛織物製造場は1571年にペータ・ヒルツェル、1573年にハンス・コンラッド・エミヤ、ハインリヒ・ホルツハルプ、ダヴィットおよびハインリヒ・ヴェルトミューラ兄弟に継承されて存続していく。<sup>(19)</sup> 彼らは、“Alt Geist”から解放されていたからである。<sup>(27)</sup>

## オレッリ家

オレッリ家は、ほかの亡命者のファミリーと同じように、信仰上の理由でロカルノからチューリヒへの亡命者であった。但し、ムーラルトの場合と違って、ほかのロカルノ人と同様に条件づきでしか都市の行政にはかかわれない、

いわば制限された市民権1591年に得たのである。

1555年チューリヒに來住したオレリ家の祖は、アロイジオ・オレリ（Orelli, Aloisio, 1486?-1572）である。彼はチューリヒへ到着すると、最初、袋物工と小売商人になった。アロイジオは住居を店舗にして、そこで袋物、帽子そのほかの雑貨を販売し、そして獣脂や麻布もイタリヤへ送っていたようである。また、小売業では石鹼、冬には蠟燭も販売していた。

彼は、毛皮職人のロカルノ人、フランシスカス・ミカエル・アブラヌスと二度ほど旅行をして、ミラノから松脂をチューリヒに送っている。明らかに彼が営んでいた商業は小規模なものであって、多額の資本を運用するようなものではなかった。貴族出身で軍人出身の彼は中庸を守り、袋物の製造と雑貨の小売りという商売に従事していた。この時代にチューリヒに來住したほかのロカルノ人もみな似たような境遇か、あるいはもっと悪い境遇から出発しているが、アロイジオは、こうした手工業によってオレリ家の繁栄の基礎を築き、そのうえ、その後も改革派の信仰を持続けたのである

アロイジオの息子のフランツとヨハネス・メルキオールは同様に商人となって、ミラノとのあいだで絹織物、毛織物、綿布など商業に従事した。前述のように制限されたかたちではあるが、彼らは市民権を手に入れることができた。

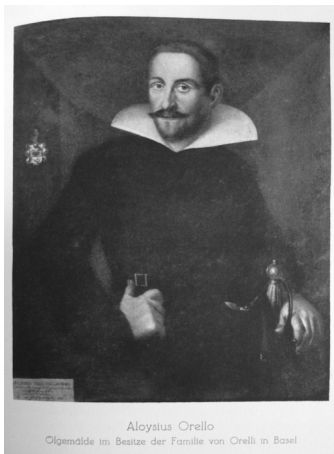
ヨハネス・メルキオールは、マルチノ・ムーラルトの娘であるヴァージニア・ムーラルトと結婚し、ルートヴィッヒ、マルチン、フェリックス（フェリーチェ Orelli, Felix, 1580-1640）、ヨハンの4人の息子たちをのこした。

この4人の息子たちはチューリヒで商工業をつづけたが、なかでも、綾織（縦糸に絹、横糸に毛を使用）製造業者カスパール・ビューストの娘アンナ・ビューストと結婚したフェリックスは1600/01年には初めて、第4グループ（3～7.5）で6ポンドの関税納付者として有産市民の列に名をつらね、1602年から15年までの間、ロカルノ人としてただ一人、その当時ルッカ出身の亡命都市貴族・商人らで構成されていた絹織物の販売で「ジュネーブでもっとも利潤の多い資本主義的な企業」であった「グラン・ボッターガ」（“Grande Boutique”）に出資し、10年間で出資額を14倍に増やした。彼はそのほかに「グラン・ボッターガ」の中心人物であるフランチェスコ・トゥレッティニ（Turretini, Francesco, 1547-1628）と会社を設立して、ドイツとオランダへ主に絹織物輸出を行っている。<sup>(28)</sup>





チューリヒのオレリー・ブルーナ夫人所有の家族の肖像の板画



アロイジオ・オレリーの父



アロイジオ・オレリーの母

バーゼルのオレリー家所有の油絵

(出典：Die Capitanei von Locarno im Mittelalter, bearb. von Kari Meyer, Zürich 1916)

1618年、フェリックスは高額関税納付者の首位に立ち、159ポンドを支払っている。そして、兄弟たちも関税納付者として上位グループをたえず占め、彼らもまたチューリヒを代表する名家のファミリーとして後世に、そして今日に至るまでバーゼル、ベルン、チューリヒにその名を遺しているのである。

表1 関税額からみた有産市民の資産の状態 (単位: ポンド)

(A)

グループ	資産額	1595/96年	1600/01年	1617/18年
1.	(75～ )	1 (109)	1 (150)	3 (338)
2.	(30～75)	2 ( 80)	2 ( 86)	3 (146)
3.	(7½～30)	4 ( 53)	2 ( 29)	4 ( 53)
4.	( 3～7½)	1 ( 6)	3 ( 13)	1 ( 6)
5.	( ～ 3)	1 ( 2)		
計		9 (250)	8 (279)	11 (543)

(B)

グループ	資産額	1618/19年	1620/21年	1621/22年	1632/33年
1.	(100～ )	2 (340)	6 (1,287)	14 (2,676)	14 (2,483)
2.	( 50～100)	5 (333)	5 ( 390)	10 ( 694)	12 ( 871)
3.	( 10～ 50)	4 ( 45)	4 ( 94)	20 ( 534)	23 ( 592)
4.	( 5～ 10)			14 ( 100)	20 ( 141)
5.	( ～ 5)			35 ( 73)	17 ( 46)
計		11 (718)	15 (1,771)	93 (4,077)	86 (4,133)

(B) の  
つづき

グループ	資産額	1635/36年	1638/39年
1.	(100～ )	22 (6,143)	23 (7,350)
2.	( 50～100)	14 ( 964)	10 ( 822)
3.	( 10～ 50)	27 ( 659)	32 ( 784)
4.	( 5～ 10)	30 ( 205)	22 ( 159)
5.	( ～ 5)	17 ( 48)	14 ( 42)
計		110 (8,019)	102 (9,157)

(C)

グループ	資産額	1641/42年	1650/51年	1660/61年	1663/64年
1.	(150以上)	20 (6,784)	18 (5,465)	17 (5,275)	26 ( 9,732)
2.	(75～150)	10 (1,095)	8 ( 761)	15 (1,665)	10 ( 1,040)
3.	(25～ 75)	18 ( 811)	21 ( 986)	11 ( 528)	13 ( 654)
4.	(10～ 25)	19 ( 293)	29 ( 467)	13 ( 223)	16 ( 255)
5.	( ～ 10)	32 ( 179)	47 ( 189)	25 ( 109)	18 ( 81)
計		99 (9,162)	123 (7,865)	813 (7,800)	83 (11,762)

出典: Maliniak, J., *Die Entstehung der Exportindustrie und des Unternehmerstandes in Zürich in XVI und XVII. Jahrhundert*, Zürich und Leipzig, 1913, S.68-100より作成

表2 企業「グラン・ポッターガ」(ジュネーヴに設立された絹製品を取り扱う企業)の  
1594~1615年の発展

1. 1594年1月1日~1598年12月31日

出 資 者	出資額 (フラン)
フランチェスコ・トゥレットイーニ	9,000
ボムペーオ・ディオダーティ	1,000
オラツィオ・ミケーリ	4,000
チェーザレ・バルバーニ	1,000
ファブリツィオ・ブルラマーキ	3,000
総資本	18,000
総収益	17,000
	年19%の収益

2. 1599年1月1日~1601年12月31日

出 資 者	出資額 (フラン)
フランチェスコ・トゥレットイーニ	10,000
オラツィオ・ミケーリ	6,000
ボムペーオ・ディオダーティ	5,000
チェーザレ・バルバーニ	3,000
カルロ・ディオダーティ	2,000
総資本	26,000
総収益	16,000
	年21%の収益

3. 1602年1月1日~1604年12月31日

出 資 者	出資額 (フラン)
フランチェスコ・トゥレットイーニ	19,000
カルロ・ディオダーティ	4,000
ボムペーオ・ディオダーティ	3,000
オラツィオ・ミケーリ	6,000
チェーザレ・バルバーニ	3,000
<b>フェリーチェ・オレツリ</b>	<b>1,000</b>
総資本	36,000
総収益	25,000
	年24%の収益
<b>オレツリ出資額金貨1,000フラン</b>	

4. 1605年1月1日~1609年12月31日

出 資 者	出資額 (フラン)
フランチェスコ・トゥレットイーニ	24,000
カルロ・ディオダーティ	5,000
オラツィオ・ミケーリ	7,000
チェーザレ・バルバーニ	4,000
デオダート・ディオダーティ	3,000
<b>フェリーチェ・オレツリ</b>	<b>2,000</b>
ヴィンチェンツォ・ミヌートリ	1,500
ジャコモ・ブルラマッキ	1,500
ジョヴァンニ・ディオダーティ	2,000
総資本	50,000
総収益	75,000
	年30%の収益
<b>オレツリ出資額金貨2,000フラン</b>	

5. 1610年1月1日~1612年12月31日

出 資 者	出資額 (フラン)
フランチェスコ・トゥレットイーニ	52,000
カルロ・ディオダーティ	10,000
オラツィオ・ミケーリ	7,000
チェーザレ・バルバーニ	4,000
<b>フェリーチェ・オレツリ</b>	<b>8,000</b>
デオダート・ディオダーティ	3,000
ヴィンチェンツォ・ミヌートリ	3,000
ジャコモ・ブルラマッキ	3,000
総資本	90,000
総収益	44,000
	年16.5%の収益
<b>オレツリ出資額金貨8,000フラン</b>	

6. 1613年1月1日~1615年12月31日

出 資 者	出資額 (フラン)
フランチェスコ・トゥレットイーニ	67,000
カルロ・ディオダーティ	10,000
オラツィオ・ミケーリ	7,000
チェーザレ・バルバーニ	4,000
<b>フェリーチェ・オレツリ</b>	<b>14,000</b>
ヴィンチェンツォ・ミヌートリ	3,000
ジャコモ・ブルラマッキ	3,000
ジョヴァンニ・ロドヴィーコ・カランドリーニ	12,000
総資本	120,000
総収益	54,800
	年15%の収益
<b>オレツリ出資額金貨14,000フラン</b>	

注：オレツリ家は、第3期（1602~1604年）からパートナーとして参加。

出典：Bodmer, Walter, *Der Einfluss der Refugianteneinwanderung von 1550-1700 auf die schweizerische Wirtschaft*, Beiheft 3 der Zeitschrift für Schweizerische Geschichte, Zürich, 1946, S. 151.

## 終わりに

信仰の亡命者の活動は、亡命にいたる当時の歴史的事情と彼らを受け入れた亡命先の都市の政治的・社会的諸条件によってことなるであろう。

ロカルノからの亡命者に限定してもチューリヒのみならず、チューリヒの政治的事情から、バーゼル、ベルンなどの改革派の諸都市へも亡命して、亡命先での手工業の発展に貢献している。これらの都市での彼らの活動をチューリヒでの亡命者の活動と比較して、彼らがもたらした商工業の種類や来住後の活動とその影響の移動を明らかにすることは今後の課題であるが、我々は、亡命者が去ったあとのロカルノの商工業の沈滞とカトリック教会による規律の強化についても注意をはらうことも必要であろう。

本論で明らかにされたチューリヒの事例からは、商工業活動を行った代表的なロカルノ人が、まず最初に小売商人・行商人のツunftであるサフランツunftに加入して、小規模な手工業から始めていることが理解される。彼らは同胞間の婚姻関係を通じて結束し、後ろ盾を得て、故郷の親類やイタリア語圏との交易関係を密にしながら事業を拡大している。やがて彼らは、それによって得た富を基礎にして生粋のチューリヒ市民を凌駕し都市政治の中核へと成り上がっていく。

マックス・ヴェーバーは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（Weber, Max, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. 1, Tübingen, 1920, 大塚久雄訳, 岩波書店, 1988年）でマリニアックの研究を引用して、次のように「世界史の上では、あらゆる信仰の移住者たち……。ロカルノからチューリヒに移住してきたプロテスタントの家族ムーラルトMuralt やペスタロッツイPestalozziなどは、やがてチューリヒにおいて近代・に独自の資本主義的（産業的……）発展の担い手となった」と指摘している（大塚訳前掲書26頁。Weber, *a. a. O.*, S.24, 50 但しペスタロッツイは、ロカルノの信仰の亡命者ではなくロカルノと同じく盟約者団の共同支配地だったキャヴェンナの改革派の家系の出身である）。

周知のように、ヴェーバーは、『倫理』論文で、近代初期の西ヨーロッパおよびアメリカの資本主義経済が発生してくる際に、その発生を担う人間諸個人を内面からそういう方向に動かしている内的—心理的起動力として作用した、そういう＜エートス＞が＜近代資本主義の精神＞だと述べた。そして、

中国、インド、バビロン、古代、中世にも存在した「資本主義」には、この「独自のエートス」が、欠けていたとしてヴェーバーは＜近代資本主義＞と区別する(大塚訳前掲書45頁, Weber, *a. a. O.*, S. 34)のだが、「中世にも存在した『資本主義』」とロカルノ人の経済的行為は事情が異なると、厳密に区別しているように思われる。

本稿の註の(4)で述べたように、1919年から20年にかけての改訂の際にマリニャック(注記15の論文)を引用して新注として加筆されたものである。1920年の『倫理』の著者序言のなかで「この版に補充したものは少しもなく、右にあげた私の反批判の中から(ごく僅かの)補充的な引用を追加して、本文のなかに、また注として挿入して、将来生ずべき一切の誤解を防ごうとしたにすぎない」こと「発表当時のこの論文の、およそ内容的に重要な見解を述べている文章で、削除したり、意味を変えたり、弱めたり、あるいは内容的に異なった主張を添加したような箇所は一つもない」(大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店1988年)と述べているが、安藤の研究は、本文の加筆(部分または全文加筆)、削除、変更、自称の変更、ゲシュペルト、引用符の変更、新注の増補、加筆と削除など、改訂がヴェーバーの言明に反して大改訂であったことを論証した。実際、ヴェーバーの妻マリアンネ・ヴェーバーの『伝記』(マリアンネ・ウエーバー著大久保和郎訳『マックス・ウエーバー』みすず書房、1961年、266頁, Weber, Marianne, *Max Weber : ein Lebensbild*, Tübingen, 1926, S. 351)には＜足の瘤＞(Fußnotengeschwulst膨大な脚注のこと)と表現されたり、また「ずっと前から絶版になっていた『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を他の宗教社会学の論文と一緒にして新しく出版しなければならなかった。そのためにはまだいろいろと手を加えねばならない」と述べているのだが。

ヴェーバーが『倫理』論文で述べている近世初頭の「資本主義の精神」と呼んできた資本主義の精神の担い手、心情の担い手たちは、「もっぱら都市貴族の資本主義的な企業家だったとか、また彼らの間にとく多かったというわけではなかった。むしろ、向上しつつあった産業的中産者身分のなかにかえって遥かに多く見られた。・・・16世紀にもすでに事態はそれと同じだったのであり、当時成立しつつあった産業は主として成り上がり者の手で造り出された者だった」と、ここでもマリニャックの『学位』論文を踏まえて述べている(大塚訳前掲書, 71-72頁, Weber, *a. a. O.*, .50)。

チューリヒの地元の手工業者たちが、ヴェーバーが述べるように「人は『生まれながらに』できるだけ多くの貨幣を得ようと願うものではなくて、むしろ簡素に生活する、つまり習慣としてきた生活をつづけ、それに必要なものを手に入れることだけ願うにすぎない」(大塚記65頁, Weber, *a.a.O.*, S.44) という伝統主義《Traditionalism》《の生活態度・心情すなわち近代資本主義以前の労働基調を保持していたかどうか明らかではない。そして、さらに「近代資本主義の精神」という新しい精神の侵入は平和なものでないのがつねであり、「最初の革新者には不信と、ときには憎悪と、道徳的憤怒の潮が浴びせかけられるのが普通」だったことは、チューリヒにおけるロカルノ人も同様な境遇であったと考えられる(大塚記前掲書77頁, Weber, *a.a.O.*, S.53)。

ロカルノ人の信仰の亡命者のみが16世紀以降のチューリヒの経済的發展を促したなどということを差し控えたい。ロカルノ人のみでなく、ルッカなどイタリア語圏から来住した亡命者、フランスから亡命したユグノーの経済活動も、それぞれチューリヒの産業發展に貢献していることを視野に入れることも必要だからだ。

しかし、16世紀後半、特に対抗宗教改革期のチューリヒに亡命したロカルノ人は問屋制と工場制そしてマニュファクチャーを導入することでチューリヒの産業發展のみならずスイスの資本主義的發展にとっても多大なというか、否、決定的な役割を果たしたことを多くの先学の研究から導きだすことができるように思われるのである。

ここで、スイスの民俗学者R.ヴァイスの、『スイスの民俗学』(Weiss, Richard, *Volkskunde der Schweiz : Grundriss*, Erlenbach-Zürich, c.1946)にも注目しよう。

ヴァイスもまたヴェーバーと同じく上述のマリニアックの『学位』論文と『倫理』論文を参照して、16世紀中ごろからスイスは近隣地域とは異なり産業的、資本主義的な経済構造を形成し、18世紀になるとヨーロッパで最高度に工業化された国となった(なお、ヴァイスは、H. Bächtold, *Die schweizerische Volkswirtschaft*, Frauenfeld 1927, 20ff.; speziell für Zürich も参照しこの16世紀半ばの産業發展から眼を背けてはいけない)。山が多い国であるため生活は厳しかったが有り余るほどの労働力が家内工業に始まる産業の振興を押しすすめたのであると指摘している。ヴァイスは、スイスを事例にすれば、近代の個人主義の文化形成はプロテスタンティズムなくしては考えられなかっただけでなくスイスの資本主義の成立はプロテスタンティズ



ム、すなわちカルヴィニズムによって推進されたことは十分に論証されていると指摘するのである。そしてプロテスタンティズムは疑いもなく民族的な共同体(ゲマインシャフト)の束縛を解体したと(Weiss, *a.a.O.*, S.115, 309)。

以上、本稿ではスイスにおける信仰の亡命者の活動を16世紀後半のロカルノからチューリヒへの亡命者に限定して考察し、亡命の事情とチューリヒ来住後の亡命者の経済活動を、再度、ツァニーノについて、そしてオレッリ家について素描をおこなった。今後は、代表的な亡命者ほかが出資したという「グラン・ボッテガ」("Grande Boutique")の事例研究をおこなってみたいと思う。

最後に、以上の記述については、次の先学の古典的かつ基本的文献に負うことが多大である。Meyer, Ferdinand, *Die evangelische Gemeinde in Locarno, ihre Auswanderung nach Zürich und ihre weitere Schicksale*, 2 Bde., Zürich, 1836; Mörikofer, J.C., *Die evangelische Flüchtlinge in der Schweiz*, Leipzig, 1876; Bodmer, Walter, *Der Einfluss der Refugianten einwanderung von 1550-1700 auf die schweizerische Wirtschaft*, Beiheft 3 der Zeitschrift für Schweizerische Geschichte, Zürich, 1946. *Zwingliana : Beiträge zur Geschichte Zwinglis / der Reformation und des Protestantismus in der Schweiz*, Bd.X, 1954-1958. Zürich, 1958. Weisz, Leo, *Die Locarner in Zürich* in : *Neue Zürcher Zeitung*, 1934(Nrn. 2145, 2198, 2259, 2320), 1935(Nrn. 13)

またスイスの歴史、特にチューリヒについては、森田安一『スイス』刀水書房、1980年、森田安一『スイス中世都市史研究』山川出版社、1991年など、同氏の多くの著作におうことが大である。また、日本での「信仰の亡命者」についての研究は、石坂昭雄「16世紀におけるネーデルランド・プロテスタントのドイツ散住—その経済史的外観—」(北海道大学『経済学研究』27-1, 1977年, 307-349頁)や諸田實「信仰の亡命者—ドイツ経済史への影響—」(神奈川大学『商経論叢』第14巻第1号, 1978年, 69-93頁)ほか少数だったから欧米と石坂・諸田論文と欧米の先行諸研究から学んできた。最近では金哲雄著『ユグノーの経済史的研究』(ミネルヴァ書房、2003年)、踊共二著『改宗と亡命の社会史』(創文社、2003年)などがある。また、未読ではあるが、ごく最近、マーク・タプリンのTaplin, Mark, *The Italian Redormers and the Zurich Church, c. 1540-1620*, Aldershot, c. 2003が出版されている。

近代スイス経済の包括的に研究には、黒澤隆文著『近代スイス経済の形成—地域主権と高ライン地域の産業革命』(京都大学学術出版会、2002年)が必

読である。後に黒澤は、「スイスの工業化過程における商人と商業・金融業」(『社会経済史学』70-4, 2004年11月31頁以下)で宗教的亡命者(信仰の亡命者)の経済活動が「スイス経済史で無視しえぬ役割を演じている」と指摘している。

これら先学の諸研究に心から感謝したい。

## 注記

- (1) Koch, Paul, *Der Einfluss des Calvinismus und des Menonitum auf die Niederrheinische Textilindustrie*, Krefeld, 1928, S. 9, 49.
- (2) Braun, Rudolf, "Protoindustrialization and Demographic Change in the Canton of Zürich", in Ch. Tilly, ed. *Historical Studies of Changing Fertility*, Princeton, 1978, pp. 289-334(高橋秀行訳「チューリヒ州におけるプロト工化と人口動態」F・メンデルス、R・ブラウンほか著、篠塚信義、石坂昭雄、安元稔編訳『西欧近代と農村』(北海道大学図書刊行会、1991年274頁)。Braun, R., "Zur Einwirkung soziokultureller Umweltbedingungen auf das Unternehmerverhalten", in : Fischer, Wolfram, hrsg., *Wirtschafts- und sozialgeschichtlich Probleme der frühen Industrialisierung*, Berlin, 1968, S.268, Anm., 46.
- (3) Bodmer, Walter, *Der Einfluss der Refugianteneinwanderung von 1550 -1700 auf die schweizerische Wirtschaft*, Beiheft 3 der Zeitschrift für Schweizerische Geschichte, Zürich 1946, SS.7-8.
- (4) Kulischer, Josef, *Allgemeine Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters und der Neuzeit*, Bd.2, München, 1929(松田智雄監修、諸田實ほか訳『ヨーロッパ近世経済史 I』東洋経済新報社、1983年、29頁以下)
- (5) Weber, Max, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd.1, Tübingen, 1920, S.23-24 (大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1989年、25-26頁)ヴェーバーが指摘しているこの箇所は、1919年から20年にかけての改訂の際にマリニャック(注記15の論文)を引用して加筆され、新注として加筆されたものである。この点については安藤英治「M・ウェーバーの宗教社会学改訂について[第一部]」(成蹊大学経済学部『政治経済論叢』18巻1・2合併号、1968年、54頁、56頁)。なお、後述するように、ペスタロッツィ家はロカルノからの信仰の亡命者ではなくキャヴェンナ出身である。
- (6) クーリッセル、前掲書、31頁。

- (7) Schnyder, Werner, *Die Bevölkerung der Stadt und Landschaft Zürich vom 14.-17.Jahrhundert*, Zürich-Selnau, 1925, S.107; Nabholz, Hans, "Die Epochen der Zürichs Geschichte", in *Zürichs Volks- und Stadtwirtschaft*, Zürich, 1928, S.15.
- (8) 森田安一『スイス』(刀水書房、1980年、205頁、212頁、森田安一「スイス史から見た4『都市国家』」『歴史学研究』471号1979年、70頁)
- (9) 森田安一「ツヴィングリの新スイス盟約者団構想について」『東京学芸大学紀要』33集、1981年、119頁以下。
- (10) モンタネ・ジェルヴァーゾ著、藤沢道郎訳『ルネサンスの歴史(下)』中央公論社、1982年、293頁。Mörkofer, *a.a.O.*, S.30-31.
- (11) Mörkofer, *a.a.O.*, S.31-35.; Stadler, Peter, "Das Zeitalter der Gegenreformation", in *Handbuch der Schweizer Geschichte*, Bd.1, Zürich, 1980, S.578-79.
- (12) 森田安一『スイス中世都市史研究』山川出版社、1991年、89頁以下。ここでは13のツンフトであるが、1440年に二つの「天秤」である毛織、亜麻布織は合同してひとつのツンフトになったと、氏は指摘している(同署、283頁の註185)。なお、同様に北村次一は、戦争の継続が都市の工業生産力の破壊と都市経済の不振を生み、その結果、両ツンフト間の合併整備がされたと指摘する(北村次一「チューリヒにおける農民一揆の展開」『国民経済雑誌』97巻6号、23頁)
- (13) Büsser, Fritz, *Huldrych Zwingli*, Göttingen, 1973(森田安一訳『ツヴィングリの人と神学』新教出版社、1980年、33-34頁)
- (14) 森田、前掲書『スイス』209頁以下。
- (15) Maliniak, J., *Die Entstehung der Exportindustrie und des Unternehmerstandes in Zürich in XVI und XVII. Jahrhundert*, Zürich und Leipzig, 1913, S.60.
- (16) 森田、前掲書『スイス』、209頁以下。
- (17) Maliniak, *a.a.O.*, S. 60; Claassen, Walter, *Schweizer Bauernpolitik im Zeitalter Ulrich Zwinglis*, Berlin, 1899, S. 10.
- (18) 森田安一「スイス傭兵制とツヴィングリ」堀米庸三編著『西洋中世世界の展開』東京大学出版会、1973年、440頁。
- (19) 同前論文、440頁。
- (20) Maliniak, *a.a.O.*, S. 61; Nabholz, *a.a.O.*, S. 16.

- (21) Bodmer, *a.a.O.*, S. 24; "Dritter Bericht über die Gewerbe der Locarner und der übrigen Wälschen" ,in Mayer, *a.a.O.*, Bd. 2, S.380-87.
- (22) Bodmer, *a.a.O.*, S. 25-29.
- (23) "Nachricht über die von Vangelista Zanino eingeführten Gewerbe" (Ex:Wickianorum vom. IX. In Bibliotheca Carolina). In Mayer, *a.a.O.*, Bd.2, S.403-04. ツァニーノについては、そのほかBodmer, *a.a.O.*, S. 28-33を参照。
- (24) " Verzeichniss der Locarnerfamilien in Zürich, vom Jahr 1564(Zürich, StA)" , in Mayer, *a.a.O.*, Bd. 2, S. 393.
- (25) " Nachricht überdie von Vangelister Zanino eigeführen Gewerbe" , in Mayer, *a.a.O.*, Bd. 2 S. 404.
- (26) Spoerry, Heinrich, *Abriss aus der Geschichte Zürichs mitt spezieller Darstellung des Handels und der Textilgewerbe von deren Anfängen bis Ende des 16. Jahrhunderts*, Wald, 1922, S. 218-19.スプエリーは、ここではBürkli-Meyer, Adolf, *Geschichte der Zürcherischen Seidenindustrie*, Zürich, 1844に依拠している。
- (27) Bodmer, *op. cit.*, S. 29-33; Mayer, *a.a.O.*, Bd.2, S. 338,Anm., 84; Schnyder,W.,*Quellen zur Zürcher Zunftgeschichte*, Bd.1, Zürich, 1936, S.329-32.
- (28) Maliniak, *a.a.O.*,S. 110-11;" Zweiter Bericht über die Gewerbe der Locarner" , in Mayer, *a.a.O.*,Bd. 2, S. 408-09;Monter, E. William, *Calvin' s Geneva*, New York, 1967(中村賢二郎・砂原教男訳『カルヴァン時代のジュネーヴ』 ヨルダン社、1978年,268頁);Bodmer, *a.a.O.*, S.67